〔下學集下草木〕蜜筒（ミツトウ）甘瓜異名也

〔易林本節用集加草木〕甜瓜（カラウリ）

〔增補下學集下草木三〕甜瓜（カラウリ）

〔物類稱呼三生植〕甜瓜（まくはうり）　西國にてあじうり、奥の仙臺にてでうり、佐渡にてちんめうと云、又江戸にて云きんまくはを、備前にてせんしかと云、奥の津輕又松前にてしまうり、南部にてはきんくはと云ふ、眞桑瓜は美濃國眞桑村の產を上品とす、故に名づくとぞ、又越前にてねづみ眞瓜といふ、味ひ甚美なり、吐方に用る所の瓜蔕是なり、其味ひ甚苦し、餘國の產は吐方に用ひて功なし、

〔和漢三才圖會九十蘊果〕甜瓜　甘瓜　果瓜　甜（甜同、音甞、甘也、）　阿末宇里　熟蔕落者（和名保曾知）　今云眞桑瓜

本綱、甜瓜味甜于諸瓜、故名、二三月下種延蔓而生、葉大數寸、五六月花開黃色、六七月瓜熟、其類最繁、有團有長、有尖有扁、大或徑尺、小或一捻、其稜或有、或無、其色或青、或綠、或黃斑、糝斑、或白路、黃路、其瓤或白、或紅、其子或黃、或赤、或白、或黑、凡瓜最畏麝香、觸之卽至一帶不收、〇略中

按甜瓜〇略中　一種有韓瓜、似甜瓜而大、皮不濃、味劣、　一種有阿古陀瓜、宛似南瓜、今人不好、有鹽味、誤瓜汁著刀劒則忽生鏽、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕眞桑瓜は、濃州眞桑村の種を京師東寺邊に栽し故、夫を眞桑瓜といひしが、今は一般にしか呼なり、一種皮の白めなるあり、增補江戸鹿子、本所瓜味美ならず、本田瓜といふ、形甚大なり云々いへり、是ほんでん瓜なり、今これを銀まくはといふ、金まくはに對しての名なり、寬永發句帳に、後藤判とあるべき金まくは哉、貞德　懷子集、大和人こんと賣なり白まくは、方好　續山井、類ひなき佳味の梵天の眞瓜かな、沙長　今も肉多く肥たるをホテタルと云是なり、おもふに本田瓜は、梵天瓜なるを、本田と書、ほんだと誤れるなり、醒睡笑、和州より出るほでんと云瓜は、延曆寺慈覺大